

算数病院事件

後藤竜二著 田畑精一絵





算数病院事件

後藤竜二著 田畑精一絵

913.6 後藤竜二
算数病院事件

新日本出版社 1975

174P 21.5cm (新日本少年少女の文学2)

後藤竜二
ごとう りゅうじ

1943年、北海道美瑛市に生まれる。早稲田大学卒業。1966年、「天使で大地はいっぱいだ」で第7回講談社児童文学新人賞佳作に入選。1970年、「大地の冬のなかまたち」で第8回野間児童文芸推奨作品賞を受賞。ほかに「地平線の五人兄弟」「ボタ山は燃えている」「歌はみんなでうたう歌」(新日本出版社)「とべここがほくらの町だ」「風にのる海賊たち」(講談社)などがある。日本児童文学者協会、日本子どもの本研究会会員。

田畑精一
たばた せいいち

1931年、大阪に生まれる。京都大学中退。人形劇団に所属していたが、現在、児童図書の装丁、さし絵で活躍中。おもな作品に、「くいしんぼうのロボット」(小峰書店)「ねずみのはととりかえっこ」(国土社)「とべここがほくらの町だ」(講談社)「歌はみんなでうたう歌」(新日本出版社)「ちびすけきかんしゃ」「おいしいれのぼうけん」(童心社)などがある。児童出版美術家連盟に所属。

新日本少年少女の文学2 算数病院事件

1975年7月20日 第1刷発行

1980年8月10日 第18刷

著者 後藤竜二

画家 田畑精一

発行者 松宮龍起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-8

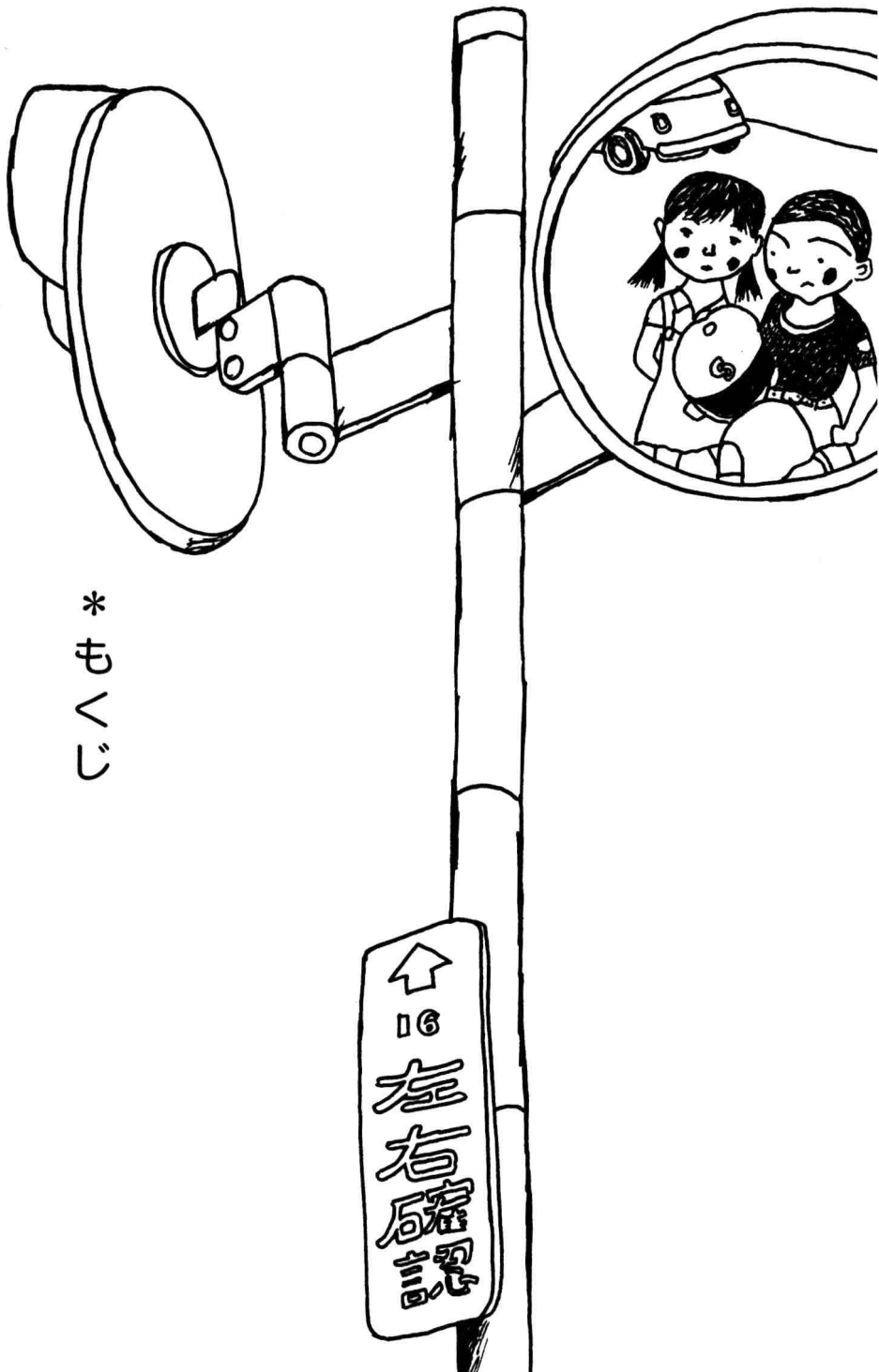
発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京(478)3311 振替 東京3-13681

印刷・光陽印刷株式会社 製本・古賀製本株式会社

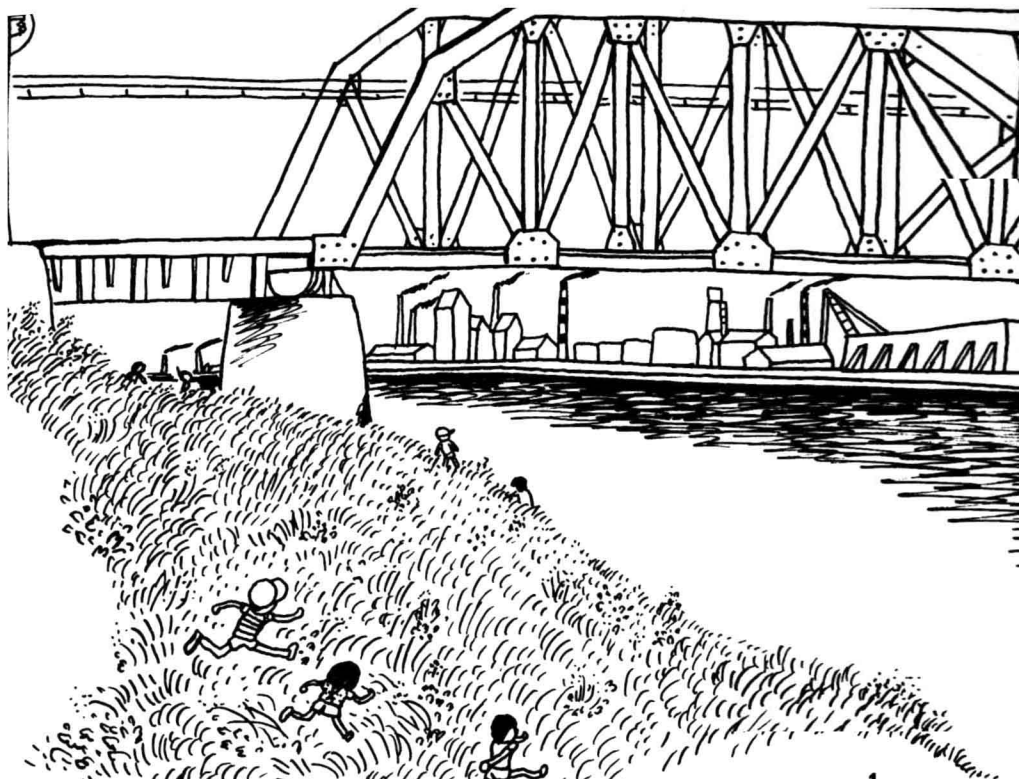
落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。

* この本の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律に認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。あらかじめ小社に承諾をお求めください。



*ごめん

↑
16
左右確認



梅雨期結束

1 つゆあけ……………5

2 算数病院……………19

眩しい

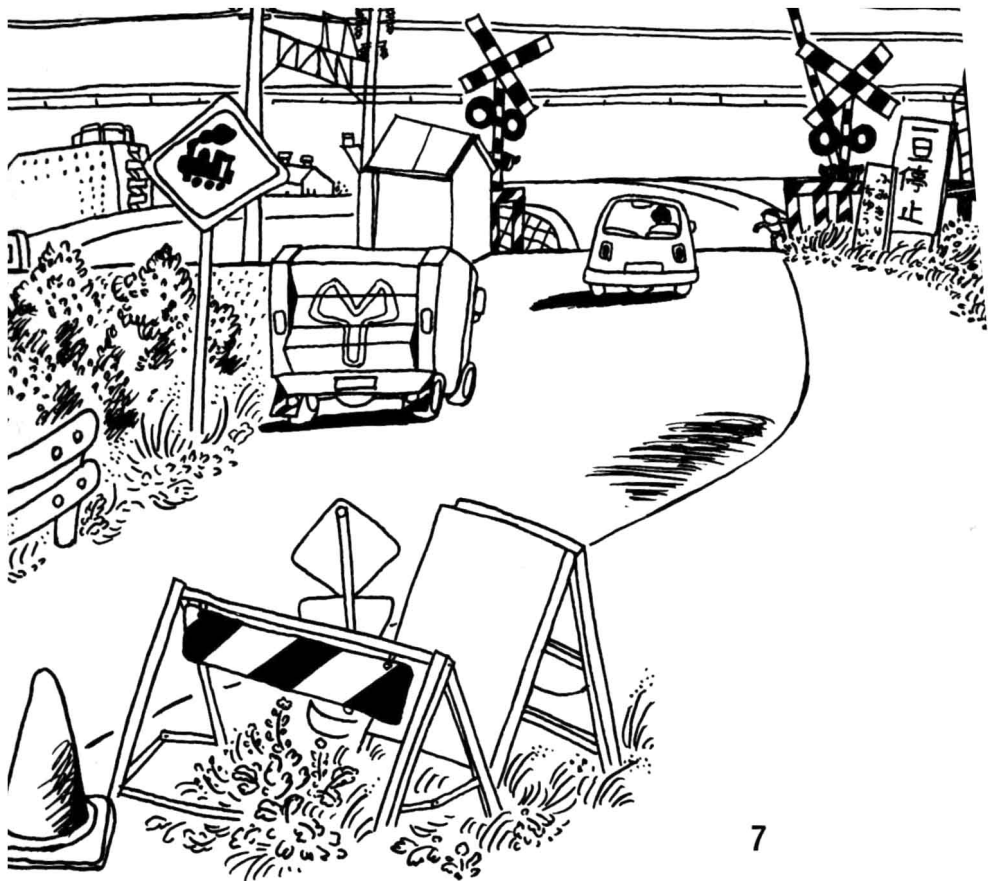
3 まぶしい朝……………35

学級会……………55

4 るすばん……………65

5 美容室……………81

6 松じいちゃん……………93



おわりに……………
173

10 花 火……………
149

9 くらい川原……………
133

鉄二の発見ノート……………
124

8 かあさん……………
115

7 ともだち……………
103

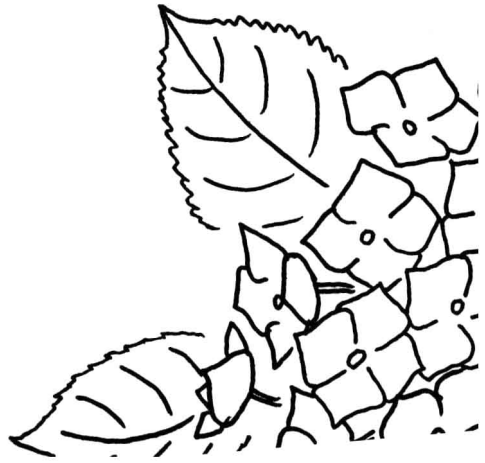
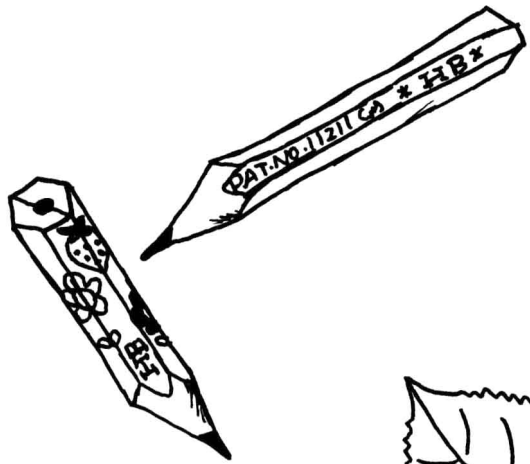
葵子・さし絵

たばたせい
いち

田畑精一



！……
うめあ
は



風が、校庭のプラタナスの葉をざわめかせて、三階建ての校舎のまどにふきこんだ。

いっばいにはきはなされた五年三組のまどで、まるい水色の風鈴が、リリイン リーンと、すんだ音をひびかせた。

汗あせにひかるいくつもの顔が、いっせいに風鈴をあおいで、ざわめいた。

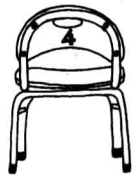
風は、教科書やノートをパラパラとめくり、廊下ろうかのまどのてるてる坊主ぼうずをぶつけあわせて、ふきぬけていった。それきり、風はやんで、風鈴のたんざくは、もう、うごかない。

(ケチな風……)

汗でひたいにはりついた前髪まがみをかきあげて、柴田鉄二しばたてつじは、またぼんやりと、校庭をながめはじめた。空が青くはれあがって、黒くしめった校庭に、いくつもかけろうがゆれている。

(はやくおわんないかな)

黒板のまえでは、白いワンピースの日野ひのとも子先生が、応用問題おうようもんだいのときかたを熱心に説明しているのに、鉄二はうわの空で、ちっともきいていない。風にめくられたままの教科書にひじをついて、もうすぐはじまる夏休みのことを、あれこれとかがえ、うっとりしている。ときどきひとりだけでやっ



とわらう。わらうと左のほおに、かすかにちいさなえくぼができた。

鉄二がわき見ばかりしてるから、はんちようのぐらさきこ班長の野口咲子が、プラスチックの定規で、ときどきコンと頭をたたいたりするのだが、なれてしまった鉄二には、すこしもききめがない。

(夏休みか……、へっへ、夏はサイコー！)

ひと月ものあいだ、からだの底にとじこめられていた力が爆発しそうになって、鉄二は授業中なのもわすれて、「ウーン。」と、両手をいっぱいあげてのびをした。

「できるひとは？」

と、ちょうど、とも子先生が、新しい問題を黒板にかいて、ぐるりとみんなをみまわした。

鉄二がのびをしたのは、そのときだ。

「あら、鉄二くん。」

とも子先生は、両手をあげた鉄二をみて、二、三度おおきなまばたきをした。

クラスみんなも、「へえー。」というふうに、ふりかえった。

いちばん算数のできる服部くんなどは、のびあがって鉄二をうかがってる。

「ふうん、ちゃんと予習してきたのね。」

あっぱれあっぱれと、とも子先生は金魚のもよりのついたうちわで、とおくから、鉄二をあおいだ。「カッチョイイ！」と、男の子たちがやじり、「やるウ！」と、女の子たちがとも子先生のまねをし

て、下じきで鉄二をあおいだ。

「じゃ、といてちようだい。」

とも子先生は、チョーク箱ばこから、わざわざ、ま新しいチョークをとりだして、鉄二にさしだした。

「え？」

鉄二は、きよとんとしている。

「黒板の問題よ。」

咲子がすばやく耳うちして、

「ほら、はやくたちなさい。」

プラスチックの定規のかどで、ごりごりと、わきばら社と西辺をこづいた。

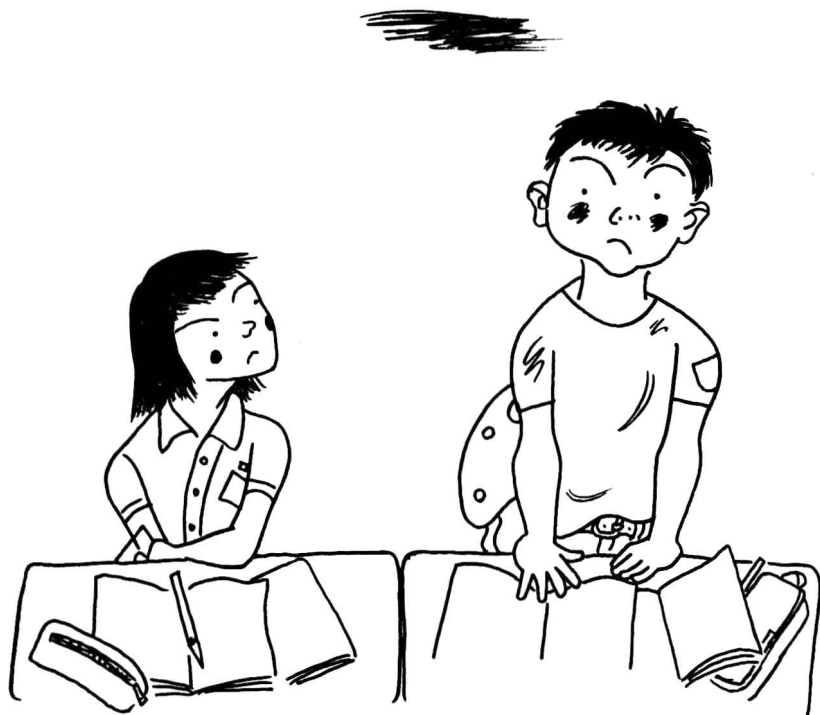
「え？ なに？ 黒板？」

咲子にこづかれ、みんなにみつめられて、鉄二は「ピース、ピース。」と、いすからたった。たつて、黒板をにらみつけた。

日の光でまぶしい黒板には、たしかに、なにやらなぞめいた文章がかかっている。

(としおさんがはり金を三分の二メートルもってるって？ それでどうしたって？ ——ちえっ、だいたい、としおってのは、どこのどいつなんだ！)

「なんだよ、あれ？」



めんどくさくなくなって、鉄二は
咲子にきいてみた。

そっときいたはずなのに、声は、
しずまりかえった教室のすみずみ
にまで、ひびいてしまった。

みんなが、いちどにわらい声を
はじけさせた。

「わき見ばかりしてるからよウ。」

咲子は、じぶんがへま（おぼろ）をしたみ
たいに赤くなって、プラスチック

の定規で、鉄二のおしりをぶった。

わらい声のうずのなかで、ピタン
とみょうにはっきりした音がして、

それでみんなは、またわらった。

「そうか、鉄二くんのバンザイは、
こうさんの合図（あいず）だったのね。」

とも子先生もわらっていた。あんまりわらって、鉄二にわたすはずだった、ま新しいチョコレート、ポキンとのひらのなかで折ってしまった。

「あたりまえさア。」

鉄二もいっしょになつてわらって、

「あんな暗号、あんどうそうかんたんにはとけないよウ。」

ピースピースと、またみんなにむかつてVブイサインをおくった。

わらい声が、それでまたひとしきり高くなつて、ようやくそのさわぎもしずまりかけたとき、

「はい！」

廊下側のうしろの席せきで、手があがった。

ざわめいていた教室が、きゆうにしずまりかえり、みんながそろりと、ふりかえた。

まっすぐに手をあげているのは、服部くんだった。

服部くんは、みんながわらっているあいだに、黒板の問題をといて、とも子先生をつきさすように手をあげたのだった。

「あら。」

と、とも子先生は、いたずらをみつげられた子どものように、どぎまぎした。

「できたの？」

「は？」

と、服部くんはききかえして、

「ぼくは、できもしないのに、手をあげたりはしません。」

ちらりと、鉄二にながし目をくれた。

「……！」

とも子先生の顔から、あいまいなわらいがきえた。

「そう……。」

とも子先生は、かかとの高いサンダルでくるっとまわると、みんなに背をむけて、ゆっくり黒板のまえへもどった。

「そうね。」

胸をはって、たった。

「さすがは、算数病院のお医者さんね。」

とも子先生の顔には、いつもの笑顔がもどっていた。

「じゃ、服部くん、ていねいに説明しながら、といてちょうだい。」

服部くんは、あげつづけていた手をおろして、音もたてずにいすからたった。

「説明は一度しきしませんから、わき見なんかしないで、よくきいてください。」

なれたようすで黒板のまえにたち、ぶあついノートをこわきにかかえて、ぐるりとみんなをみまわした。

「あとで、算数病院にいらてくれ、なんていってきてもしりませんよ、いいですね。」
いいですねと、とくに鉄二のほうをみて念ねんをおした。

算数病院・というのは、とも子先生が発明した病院だ。クラスのみんなが、算数のできる子になるう、という目的でつくられた。とも子先生が院長で、服部くんと由季ゆきちゃんが医者になっている。水曜と金曜の放課後ほうかご三十分、わからない子はこの病院に入院する。でも、すすんでじぶんから入院する子はあまりいなくて、たいていは、とも子先生に入院をめいじられるのだ。

「いいですね。」と、服部くんが鉄二に念をおしたのは、鉄二がいちばんおおく入院させられているからだ。

念をおされて、みんなにくすくすわらわられて、鉄二はぶいとそっぽをむいた。

(ちきしょう、おぼえてやがれ！)

だけど、服部くんはもう鉄二のほうなぞみようともしない。黒板をいっばいにつかって、問題をといている。すらすらと式をかき、定規もつかわずにまっすぐな線をひき、つかえることもなく説明して、みどりのシャツについたチョークの粉こなを白いハンカチではらいながら、すつとじぶんの席にもどってしまった。わざわざもってきたぶあついノートは、とうとう一度もひらきさえしなかった。



みんなは、服部くんのみごとな説明を、あっけにとられてきいてたけど、

「わかった？」

とも子先生の声に、やっとわれにかえってざわめいた。

(なんでえ、あんなもの、ちよつと努力どりよくすればおれだって——)

鉄二はすましている服部くんをにらみつけてから、首をのぼして、黒板の文章を二度よみかえし、(おれだって——)と、三度目を半分よんだだけで、いまいましそうに黒板から目をそらした。

(ちえっ、あんななぞがとけたか
+らって、どうってこたないんだ)

きいていないようなふりをして、服部くんの説明はしっかりきいていたはずなのに、やっぱりちんぷんかんぷんだった。

(へっ、どうってこたあないんだ)

チャイムもなっていないのに、教科書とノートをパタンととじてしまった。とじた教科書にふてくされたかっこうではおづえをついたら、

「服部くんて、さすがねえ。」

ささやきあうかすかな声が、うしろの班はんからきこえてきた。

「……………」

びくっとして、鉄二はほおづえをはずした。

はつきりきこえたわけではなかったけど、それは、たしかに、由季ちゃんの声だった。声の主ぬしをたしかめようとして耳をすましたけど、

「私しり立りうけるから、いまから受験勉強してるんだってよ。」

「へえ、デキがちがうのね。」

さっきの声とはちがういくつもの声が、ざわざわきこえてきただけだった。

(デキがちがう……)

鉄二は、女の子たちをにらみつけてやろうとして、やめた。由季ちゃんが、ひょっとして、うなず